

Title	<批評・紹介>森時彦著「中國近代綿業史の研究」
Author(s)	中井, 英基
Citation	東洋史研究 (2002), 61(2): 338-345
Issue Date	2002-09-30
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/155421">https://doi.org/10.14989/155421</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

森 時彦著

## 中國近代綿業史の研究

中 井 英 基

中國の綿紡織業（以下、單に綿業という）は、綿産地の長江下流域を中心に、一千年もの長い歴史をもつ代表的な産業の一つである。かつて非綿産地であった華北や華南では、長江流域の華中から綿花を移入して手紡ぎ、手織りして家族の衣料を賄いつつ、内職収入をも得ていた。綿業の生産工程はこのようにまず綿花の栽培（ないし入手）に始まり、次に綿糸の手紡ぎ（土紗・土糸）、そして綿布の手織り（土布）で完結するという長いプロセスの、

農工結合した産業であった。手紡ぎと手織りは大抵どこでも農村の家内手工業として行なわれ、例外的に都市で艶出しなどの加工がされた。その綿布は、國內數億の大衆の衣料となっただけでなく、海外にも輸出され、高級品がロンドンやパリの社交界で貴婦人を飾ったこともあったという。近代に入つて開國と共に外國綿製品流入の影響を受けると、いやがおうでも大きな變貌を遂げざるをえず、上記の手工業が衰退した地區が多かつた。しかし、他方で輸入された外國の機械製綿糸（機紗・洋糸）が原料として手

紡糸に混ぜられて（初めは經糸のみ、後には經糸・緯糸兩方に）手織りされ（新土布）、商品生産地として發展した地域も少なくなかつたのである。また綿産地も華中から華北や華南に廣がり、かつ中國綿花の品質改良が圖られただけでなく、纖維のより長いアメリカ綿花も栽培されるようになり、國內の需要に應える他に輸出される分量も多く、結局その価格は海外需要の動向にも左右されるようになった。さらにまた上海など沿岸都市では外國から紡績機械を輸入して近代工業として發展もした。第一次世界大戦後には紡績會社の兼營織布や織布專業の工場も増加した。こうして近代中國の綿業は、天候に左右されがちな原料綿花の不安定な供給の下、農村の手工業段階の在來綿業（新土布のみならず、新たに機械製の細糸を用いた手織りの細布Ⅱ改良土布も登場）と、都市の近代綿工業とが相互に關連・補完し、かつ競合・對抗もしつつ、複雑で屈折した展開を見せたのである。

この中國綿業についての歴史的な研究として、誰もが眞先に思い浮かべる書物は、今は故き嚴中平氏の『中國棉紡織史稿（一二八九—一九三七）——綿工業史よりみた中國資本主義の發生と發展の過程——』（北京、一九五五年）<sup>1)</sup>であつただろう。中國綿業は、前述のように中國を代表する産業であつたから、その研究も戦前から盛んであつて、中國では、例えば方顯廷・王子健<sup>2)</sup>等の綿工業の研究や調査があつた。また關係の深い日本でも豊富な蓄積がある。嚴中平氏の先の研究は、綿業で手工業段階から中國の資本主義がどのように始まり、外國の侵略下にあつても着實に發展し、外國資本と競合しつつ、ついには日中戰爭と革命を迎え、社會主義化せざるをえなかつたその過程、換言すれば「半植民地半

封建社會」における資本主義化の典型事例を理論的かつ實證的に分析し、一つの見通しをつけようとした。まさに社會主義の新中国發足を象徴するような、唯物史觀に則つた初の本格的な研究であり、戦後の新しい研究の出発点となつた。一九五〇、六〇年代の我が國の中國綿業史研究は、この嚴氏の研究の強い影響下に進められた。そして一九七〇年代以降も同様の傾向の研究が續くかたわら、評者のごときは、その嚴氏の研究に導かれながら、同時に反發もし、企業史・企業者史というミクロの視點から一九世紀末から二〇世紀初めの中國綿業について初步的な分析を試みた。そして外國の侵略とその影響如何という問題の枠組みよりも、「花貴紗賤」(原綿高の綿糸安)という當時の市場條件に對する紡績企業家の對應の仕方に中國綿工業の分かれ目があつたのではないが、また農村在來の手紡糸や手織綿布も、外國綿製品の壓力で簡単に衰退したのではなく、機會費用がほとんどゼロに近い家内勞働力を完全燃焼し、それを梃子に近代工業製品に抵抗し續け、日中戦争期まで根強く存続したのではないか、という假説的な見通しも提起した。そして一九八〇年代には中國史・日本史の双方から新しい世代の研究者も多數登場し、中國綿業史の研究が新しい段階を迎えた。とくに東の久保亨氏、西の森時彦氏が有能な若手研究者として注目されてきた。ここに紹介する大作『中國近代綿業史の研究』は、その森氏のこれまでの研究の集大成である。以上は、中國綿業史の評者なりの研究史の整理である。わざわざ言及したのは、本書がこの點にほとんど觸れていないので、本書を理解する上で必要と判斷して付け加えた蛇足である。

## 二

本書は、森時彦氏が二十年近い研鑽を重ねて築き上げた、文字通りの中國近代綿業史に關する本格的な専門書である。氏の研究對象が狭い「綿工業」だけに限定されず、農村在來綿業をも包み込んだ「綿業」であることにまず留意すべきである。したがつて、氏の研究は綿業全體に及ぶ幅廣い「産業史」の部類に入るであろう。その意味では、先の嚴中平『中國棉紡織史稿』の系譜を引きながら、後述のように一段と高い水準に引き上げた劃期的な勞作であると言つてよい。

本書は、「緒言」に續く、次の五章と別章によつて構成されて

- 第一章 中國近代における機械製綿糸の普及過程
- 第二章 中國在來綿業の再編
- 第三章 中國紡績業の「黃金時期」
- 第四章 「一九二三年恐慌」と中國紡績業の再編
- 第五章 中國紡績業をめぐる市場構造の變容
- 別章 中國綿業の近代化過程

まず「緒言」では、近代中國の綿業の展開過程を二つの段階、すなわち「在來セクターの變容期」と「近代セクターの形成期」に分け、前者を「インドで生産された機械製の太糸が中國の農村市場に流入し、土糸の代替品として土布の原料綿糸に使用されるようになる過程」、後者を「日本あるいは中國で生産された機械

製の細糸が、改良土布もしくは機械製綿布の原料綿糸という新しい市場を開拓していく過程」であるとしている。後者はとくに日本紡績業の商品輸出と資本輸出の影響下にあったとしている。二つの段階の境目は「一九世紀末から二十世紀初頭のあたりに」その起点を求め、「第一次大戦以降にその本格的発展段階を想定する」という。ここで第一の段階を、機械製綿糸の普及につれ、

「在來綿業が變容していくプロセス」であるとしている點に要注意である。従來は、外國勢力の侵略に伴う在來綿業の「衰退過程」として見なされてきた経緯があるからである。また同時に第二の段階についても、「従來はほとんどみられなかった問屋制家内手工業、さらにはマニファクチュア、機械制綿工業など、前近代には無かったという意味での『近代的な』生産形態が登場した」と述べているように、あくまで括弧付きの「近代」セクターの意味ではない。本書は中國近代綿業史をこのような二つの段階に大きく分けたあと、この綿業の歴史的展開を、「主に機械製綿糸と原料綿花の流通過程に着目しつつ、かつ出来る限り定量分析のデータに依據しながら、實態解明することに努めた」という。本書の力點、主に綿糸と原綿の流通過程を考察したこと、出来るかぎり統計數字を集めて定量分析をしたこと、この二點に本書の最大の價値がある。そしてもしあるとすれば限界もそこにある。

次に各章を概観しよう。第一章では、「機械製綿糸の普及過程」、すなわち在來綿業の變容過程をさらに三つに區分している。第一期（一八七〇年代―一九世紀末）はインド機械製太糸が、折からの「銀安錢高」傾向に助けられて中國農村を席卷し、土糸に代替

したが、その分量は毎年約六〇〇萬擔と推計される中國農村綿糸消費量のうちの三分の二（四〇〇萬擔）に達したことを指摘している。しかし、インド綿糸が消費されたのは新土布の商品生産においてのみであり、家用生産では従來通り土糸が根強く存続したとも附記している。また「銀安錢高」傾向は一九〇四年から反轉し、「銀高錢安」となつて輸入綿糸の普及に不利に作用したために、二〇世紀に入ると上海を中心とする中國民族資本が生産する機械製綿糸が競争力をもち、輸入綿糸に部分的に代替し擴大しはじめた。したがつて第二期（一九〇〇年―一九二〇年）における機械製綿糸の消費量は「ずっと四〇〇萬擔前後に停滯した」という。第三期（一九二〇―三〇年代の農村恐慌期）は、機械製綿糸普及の第二次急増期であつた。中國紡績業は第一次大戦期の黃金時代を契機に急速に生産力を増大させて、機械製綿糸の自給化を達成したが、太糸の需要は依然として四〇〇萬擔前後に停滯したままであつた。他方で、「都市部における紡績工場の兼營織布、專業織布工場、農村部における改良土布の生産など」「近代セクター」が輸入代替化を進めて、二〇番手以上の機械製細糸約三〇〇萬擔を消費した。こうして一九三〇年前後において中國機械製綿糸の普及は合計七〇〇萬擔のピークに到達し、「一つのサイクルを終えることになつた」という。

在來綿業の再編を扱う第二章は、とくに長江中流域の沙市と下流域の武進を中心に、機械製綿糸の普及に伴う在來綿業の市場構造の變容プロセスを分析する。まず湖北西部の沙市は上流の四川向け綿花供給地であつたが、四川へのインド綿糸の流入に伴う新土布生産開始によりその意味を失い、また湖北綿花の對日輸出が

急増すると、漢口がその中心となり、沙市はその供給基地になれなかつたという。また江南の武進では農村織布業が問屋制家内工業に移行しはじめたが、第一次大戦期の活況の中で不正行爲が頻發し、さらに問屋制から製品管理がし易い工場制手工業に移行しはじめたという。第二章の主旨は以上のとおりだが、總じて沙市と武進という地域が中國綿業との關連の中で典型的なのか、それとも特殊なのか、特殊ならばどのような意味においてか、必ずしも全體の中での位置づけが明確ではない點が惜しまれる。

第三章は、第一次大戦中の中國紡績業の「黄金時期」を原綿と綿糸の流通面から取り上げる。大戦の長期化で輸入品が途絶えて中國でも輸入代替型の綿工業が成長、機械製綿糸への需要増と、一九二〇年まで綿糸相場の高騰が續いた。他方で綿花は安値で安定したので、ここに「紗貴花賤」（綿糸高の原綿安）が出現、「空前絶後の超過利潤をもたらした」。また折から起こつた反日運動の一環である「國貨提唱」のよびかけも重なり、未曾有の紡績ブームが到来、この時期に四倍に急擴大した。またこの期間に太糸綿糸の競争力を失つた日本紡績資本は、中國市場に直接進出し、工場を建設しはじめた。商品輸出から資本の輸出への轉換である。大戦後に民族資本の生産規模の擴大と、日本資本のいわゆる「在華紡」の進出が重なり、中國綿糸市場を一變させる事態となつた。

第四章は、「一九二三年恐慌」發生のメカニズムを分析しながら、中國農村の機械製綿糸市場の構造的特質を解明している。恐慌の原因は「花貴紗賤」（原綿高の綿糸安）であるが、それをもたらしたのは中國民族紡績の急増と「在華紡」の大量出現であり、その結果綿糸の過剰生産と原綿不足が生じた。ただし、この生産

過剰は二〇番手以下の太糸市場のみであり、それ以上の細糸の需要は旺盛であり、日本から輸入されていた綿糸にはほ獨占されていた。したがつて「一九二三年恐慌」は農村織布業に限定されていた太糸固有の構造不況であり、以後上海「在華紡」を先頭に中國綿工業は太糸から細糸への生産シフトが進行したという。

第五章は、「内陸紡」という中國内陸部に立地する民族紡の一事例（長沙・湖南第一紗廠）を中心に、先述の細糸への生産シフトが進行した結果、一九二〇年代後半の中國綿工業に發生した市場構造の變容について検討している。中國の機械製綿糸市場は、大戦中の「黄金時期」以降「上海を中心とする同心圓的統一市場が形成され」たのに伴い、綿花は「在華紡」の細糸生産用の原綿を供給する市場が上海と直結し、上海棉花市場の影響下に置かれたが、内陸部・紡績會社の太糸用原綿を供給する地方の棉花市場は上海市場から相對的に孤立していたために、そこに「黄金時期」と同様の「紗貴花賤」が出現し「内陸紡」の繁榮があつたとしている。しかし、この第五章での問題點は、はたして長沙・湖南第一紗廠の例が「内陸紡」というモデルをどこまで代表しているのか、必ずしも明確ではない。註（40）（四二二—三頁）で久保亨氏の研究との相違が言及されているだけに、この點が惜しまれる。

別章は、「以上の諸章で重ねてきた分析の結果を土臺にして」「中國の開國から、中國近代綿業のひとつの到達點を示す日中戦争前夜までのほは一〇〇年におよぶタイムスパンで、中國在來綿業の近代化の過程を俯瞰」したものであり、「學部學生向けの啓蒙書に執筆した中國近代綿業通史のような性格の文章であるので、

まずこの部分を讀んで本書の全體像をかいつまんで理解した方が、「あるいは便利かもしれない」としている。

### 三

ほほ以上が、評者が理解し、要約しえた範圍での本書の概要（及び極く小さな問題點の指摘）である。この拙い概要からも窺えるように、本書は近代中國綿業の展開過程を「在來セクターの變容期」と「近代セクターの形成期」の二段階に分け、機械製綿糸と原料棉花の流通過程に着目し徹底的に定量分析を試みている。半世紀前の嚴中平「中國棉紡織史稿」を知る者からみれば、その質的な高さ、研究水準の格段の違いは明白であり、その解釋の確かさと裏付けの豊富なデータ（本文の圖表一七一枚、別表三八枚、計二〇九枚！）には壓倒される思いがするであろう。専門外の研究者からみれば、中國綿業は資料が豊富で、研究しやすいような印象を持たれるかもしれないが、實際に携わった研究者はだれでも、確實な資料の不足、とりわけ統計の缺如、不備に泣かされてきた。とくに大きな圖書施設のない地方の研究者は、年數回に限定された統計資料の複寫収集だけでも大きな負擔であつて、數十年という時系列の資料の分析までたどり着けない状況にある。森氏は京都という比較的恵まれた環境にあつたとはいえ、それでも森氏の二十年近い統計資料の収集と處理の勞苦、そしてその理論的な處理の努力には敬服するしかない。前述のごとく評者は第一次大戦以前の中國綿業を研究した者であるが、その貧しい經驗に照らしても、本書の多くの結論は概ね妥當であり、強い説得力をもつと思われる。中國綿業史は、本書によつて全く新しい時代

に入つたと斷言できるだろう。

しかしながら、瑕瑾を免れないのは研究という人間の營みの宿命であろうか。以下、氣がついた點を若干指摘しておきたい。第一に、中國綿業史についての研究史の整理が本書に缺如していることを指摘せざるをえない。この書評の冒頭で、あえて評者が研究史の整理を試みざるを得なかつたのはまさにこの點とかわかる。これだけの大作であり、劃期的な研究であるだけに、研究史の整理とその中への本書の位置づけがないことに大きな違和感を覺えざるをえないのである。本書は嚴中平氏の研究について、個々の數字や論點についての言及は多いが、全體的な問題についてはわずかに「中國における近代紡績業の發展段階については、從來二つの見解があつた。嚴中平氏はおもに對外關係の視點から、中國近代紡績業史の時期區分をするので、日清戰爭に一つの劃期をおいた」（三七頁）云々と觸れるのみである。かつて評者は嚴中平氏という高い壁に向かつて何度も體當たりした經驗をもつ。評者の場合、良くも悪くもいつも嚴中平氏が出發點であつた。それより十年ほどあとになるが、森氏もほほ同様であつたと想像する。しかし、評者とは壁におつかつた地點や角度が違はずである。どこが、どのように違うのか、それは何故か、あるいは嚴中平氏はそもそも森氏にとつて高い壁ではなかつたのか、森氏にとつての研究の出發點は果して何だつたのか、ここに中國綿業史の研究上の問題點（少なくともその一部）が凝縮されているはずである。森氏の問題意識、そして本書が達成した高い價值を讀者に明確に確認させるためにも、研究史の整理が必要ではなかつたか。

この點と關連するのが、第二の參考文獻目錄の問題がある。普

通、學術書ならば卷末に記載されるはずの文獻目録が本書にないのである。本書の最後にある別章には、簡単な文獻が列擧されているが、重複するものもあり、きわめて中途半端なものでしかない。おそらく圖表で頁數をとられたために紙幅に餘裕がなかったであろうが、森氏の問題意識と發想、そして定量分析の基礎資料をまとめて確認する目録がなくて残念である。

第三は、本書の根幹となる統計數字についての問題である。中國紡績業の紡錘數とその稼働率・生産性（當該年度の紡錘數に一・九擔をかけて算出）が若干過大評價されており、その分土糸・土布の生産高が過少評價になっているのではないか、という疑問である。本書がもとづく中國の丁氏の研究では、基準とされた大生紗廠の場合、年間三〇〇日を操業期間として計算しているが、毎週日曜の休日（それだけで五十二日）の他に、陰曆の春節を中心に約一週間の正月休みがあり、さらに資料によつては大生に夏期、稻の收穫時期に一ヶ月近い休暇（操業中止）もあったという指摘もあり（つまり工場労働者が同時に農民でもあった！）、操業期間はもっと短くなる。民族紡の中で經營者をほとんど交代させていない超優良企業（大生）でもこのような操業状態なので、經營不振に陥つて經營者を交代させ、組織變更・操業停止した企業の多かつた近代中國の場合（とくに第一次大戦前）、年間三〇〇日の操業期間とか、一紡錘当たりの生産性などの平均値がどれほどの普遍的な意味をもつか、時期ごとの檢算が必要ではなかつたか、と疑問が生じる。紡績機械にしても企業によりその構成は一樣ではなく、創業の古い企業ほど初期の古い設備もあれば、比較的新式のものもあり、その保守・管理は容易ではなかつた。

現在、中國各地の紡績工場を見學して驚くことは、たとえ百年前の舊式で能率が悪い機械であつても修理し部品を補ひ十二分の手入れをして稼働させていることである。新式で効率のよい機械とそうでない舊式機械を並行して操業させることは、生産能率とコストからいえば明らかにマイナスであるが、それを廉價な労働力で補おうとしている（その結果、過剰労働と勞賃コストの上昇を招く）。中國では機械というものは完全に廢滅するまで稼働させねばならないという原則があるかのようにである。近代機械生産の過大評價は、當然傳統部門の過少評價にならう。平均値の修正は、それがたとえ僅かであつても結果に大きな差異をもたらすので、出發点となる數字の設定にはより慎重な檢討が望まれる。

第四は、本書が綿糸綿花の流通過程の定量分析を心掛けたために、當然のことながら、紡績企業の經營問題が考察の対象からはずれたことの再確認である。近代中國綿業における「花貴紗賤」ないし「紗貴花賤」の構造とその統計數字上の大枠は、本書の分析したとおりであらう。しかし、中國紡績業の企業經營者はその時々市場條件に對して何をしたのか、あるいは何をしなかつたのか、資本調達の手夫や技術革新、原綿改良、雇用對策、業界全體としての取組みや指導、政府との關係改善等の經營諸問題がそこに登場してくる。本書もできるだけその點に言及しようとしているが、まだ極めて限定的ではない。例えば、「官利」を單に「公約配當金」（三四七頁）とだけ説明しているが、それでは不十分であらう。そのような理解では、「花貴」に對する原綿對策と、それに直結する中國民族紡にとつて最大の資金問題が浮かび上がつてこない。「官利」の問題を掘り下げた拙著「張謇と中國

近代企業』の意味がないことにならう。企業トップの最高意思決定は、綿糸・綿花の市場条件に影響されるが、それだけで自動的に決定されるわけではなかった。中國綿工業の經營史研究（企業史・企業者史研究）は、本書の成果の上に立つて、むしろこれから本格的に始められると言つてもいいのではないかと。

その他、本書の各章で註や綿業の用語等の説明が繰り返されている部分がある。これまでの既發表の論文を収録するに當たり、時間の制約もあり、記述の重複の削除にあまり注意が拂われなかつたのかもしれない。自戒を込めて最後に觸れておきたい。

さて、以上の指摘と感想は、本書の高い價値を確信しているからこそ、あえて評者が試みた的外れの妄言である。著者には非禮をお詫びしつつ、讀者諸兄にはもし意のあるところをお汲みいただければ幸甚である。

## 註

- (1) 嚴中平著『中國棉紡織史稿（一一八九—一九三七）——從棉紡織工業史看中國資本主義的發生與發展過程——』北京、一九五五年、再版、一九六三年。依田憲家譯『中國近代產業發達史——「中國棉紡織史稿」——』東京、一九六六年。
- (2) Fong, H.D. (方顯廷) *Cotton Industry and Trade in China*, 2 vols, Tiensin, 1932 (華譯本『中國之棉紡織業』上海、一九三四年。梨本祐平編譯『支那經濟研究』東京、一九三九年)。王子健・王鎮中編『七省華商紗廠調查報告』一九三五年。
- (3) 戦前の日本の研究としては、例えば、橋本奇策『清國の棉業』一九〇五年、西川喜一『棉工業と綿絲綿布』一九二四年、山崎長吉『支那の紡績と織物』一九二七年、名和統一『日本紡績業と原綿問題』一九三七年などがある。
- (4) 嚴中平氏（一九〇九年七月十五日—一九九一年一月二四日、江蘇省出身、享年八十二歳）の經歷・研究業績などについては、經君健編『嚴中平文集』北京・中國社會科學出版社、一九九六年、に詳しい。嚴氏には他に編書『中國近代經濟史統計資料選輯』北京、一九五五年の編書がある。なお、當初西洋近世史を旨指したという嚴氏の研究歴と、評者自身の嚴中平・王子健兩氏との面談（一九八二年秋、八三年春上海）を併せて考えれば、嚴氏の『中國棉紡織史稿』は同氏の戦前の著作『中國棉業之發展』（一九四二年）の改訂版であり、戦後の新しい研究というよりも戦前（一九三〇年代後半の中央研究院社會科學研究所）の諸研究を、唯物史觀から總合、再整理したといえるのではないかと。
- (5) 代表的な研究を挙げれば、小山正明「清末中國における外國綿製品の流入」一九六〇年、田中正俊「明末清初江南農村手工業に關する一考察」一九六一年、同「西歐資本主義と舊中國社會の解體」一九六七年、などである。波多野善大「上海機器織布局の創立とそれをめぐる諸問題」一九五八年、は趣はかなり違うが、その成果の上に立つ企業史研究といえるだろう。
- (6) 一九七三年以降、評者が張謇と大生紗廠を軸に公表してきた諸論考は拙著『張謇と中國近代企業』北海道大學圖書



刊行會、一九九六年、に収録した。

(7)

久保亨「近代中國綿業の地帯構造と經營類型——その發展の論理をめぐって——」『土地制度史學』一一三、一九八六年、同「青島における中國紡——在華紡聞の競争と協調」『社會經濟史學』五六—五、一九九〇年、同編『中國

經濟一〇〇年のあゆみ——統計資料で見る中國近現代經濟史』創研出版、一九九一年、などが擧げられる。

二〇〇一年四月 京都 京都大學學術出版會  
A五判 一六五—一八五—頁 一三〇〇圓